
百と九十九

橘立花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百と九十九

【Nコード】

N9945R

【作者名】

橘立花

【あらすじ】

やること成す事、至って普通。そこらへん探せば普通にいそうな男子高校生。そんな僕に訪れた転機。そして転落。ふざけた神様とボクのお話。

プロローグ：「僕の知ってる神様と違う…」

神様っていると思いますか？

見えない何かを信仰したりとかそういうことじゃなくて、目に見える形で存在するか？っていう話です。

そんな質問されたりしたら、大抵の人間はこう答えると思います。

「もしかたしら…いるんじゃないかな」って。

そうやって人は言葉を濁します。存在するとは思えないけど、存在しないとも限らないから敢えて断言はしない。

人はそうやって真実から目を背けたがります。でも、もちろん断言する人もいるとは思いますが。

それでは僕の答えです。

神様はいます。

願いや望みではありません。

つまり何が言いたいかというと……。

僕は頭がおかしくなってしまったようです。

ブログ：「僕の知ってる神様と違う…」（後書き）

どうも橋立花です。くれぐれも「たちばなたちばな」と繰り返さないようお気を付けください。

とても久しぶりな連載小説という事で至らない点などありますが、少しでも楽しんで貰えれば幸いです。

それと更新は不定期な可能性があります、最低でも3週間ぐらいに一回は投稿できるように頑張ります。

ここまで足を運んでくださったのも何かの縁でしょう、今後とも読んでくださるとありがたいです。

blog <http://uyumatari.blog.shinobi.jp/>

第1話：マジでミスする5秒前

時計の針は二時を少し超えたあたりを指し示している。そんなおやつ時間もそこそこの放課後、閑散かんさんとした学校の中庭のベンチに、一人の男子高校生が座っていた。校舎で囲まれたそこは、昼休みになると飲み物を買いに來る生徒でごったがしたりするが、放課後は基本的に静かものだ。

そしてお昼を過ぎたそんな時間であるにもかかわらず、陽の光は今日も燦々さんさんと大地に降り注いでいる。未だに木の幹には、何匹かの蝉せみ達が忙しくミンミンと鳴いている。たまに本などでは蝉せみ達が輪りん唱しょうしている、といったような比喩表現が用いられているが、これはただの騒音に他ならないだろう。風流とか感じる余裕もなく、誰もが迷惑がっていることだ。しかしそんな中でもそうでない人もいる。その蝉を虫力ゴに捕まえて家に持ち帰る小学生ぐらいの子供だ。結局その捕まった蝉達は大人によって自然に還されるか、そのまま放置された拳句死んでしまうわけだが、僕は思う。なんでそんなものが存在するのかと。

高校生二年生になった僕はつくづく思った。

外にいればじわじわと汗が噴き出るような天気。なぜもう放課後なのかという今日は何かの都合上学校が短縮授業だったためだ。そして早く訪れた下校の後、このベンチに座っている。帰宅しない理由はあると言えはあるんだが、ないと言えない。まああれだ、家に帰ったところで暇に変わりはないからだ。僕はそんな暇を軽減するためにヘッドフォンを耳にかけている。しかしヘッドフォンは今に限ってつけているという訳ではなく、基本的に着けられる時はほぼ常にかけている。もちろん常時装備しているヘッドフォンからは音楽が鳴っていて、耳元からは安っぽいロックンロールが洪水のように流れている。たしか今聴いているのはセックスピストルズ

というバンドだ。僕みたいな人間が言うのは失礼かもしれないが、僕にはどうもそのバンドの良さがわからなかった。時代を感じるような古臭いメロディで、なにより当時の録音環境も悪いせいか、音がとても安っぽく聴こえた。しかしそれを再生して耳を傾けている僕がいる。別段嫌いというわけではないのだ。

そんな感じで、僕は一人で静かな放課後を過ごしている。一度鞆から小説を取り出し読もうとしたが、暑さのせいか集中できず5、6ページ読んだ辺りで読むのを止めてしまった。皆室内に入って読めばいいと思うだろうが、屋内にはまだ生徒が割と残っていてそこからでたむろしている。残念なことに友達の少ない僕は、その輪に飛び込んでいくことはできない。それに元々望んでいない。さてどうだろう。もしそんなグループに、誰も知らない一人の男子生徒が加わろうとしたら。…まず間違いなくその全員が戸惑うであろう。そして僕は避けるであろう。僕の学校での位置付けなんてそんなものだ。一度張られたレッテルは二度と剥がせない。社会で言うところの階級制度みたいなものだろう。僕くオタクの生徒く普通の生徒くチャライ生徒。つまりこんな感じ。考えたのは僕だけだ。

僕はよくこうやって時間を潰すべく放課後に一人でこうしていることが多いが、これといって寂しいというわけではない。元々一人でいることが好きだからだ。そしてあまり自覚はしていないが、この場所は僕には落ち着く空間だ。

たびたび訪れるこのベンチは、放課後においては僕の指定席になっていた。

…にしても暑い。外で気温が高いのはもちろんだが、なにより日差しがづらい。太陽光線は僕の肌を黒く焦がすべく、じりじりと音をたてるかのように照らしつけてくる。そして太陽がモロに当たっている頭は、黒い髪が熱を吸収しているのかとても熱くなっていた。少し頭がボーっとする。そしてヘッドフォンも悲惨なことになっていた。まずそれ自体が熱くなっているということもあるが、ヘッド

フォンと耳とが密着している部分が蒸れていて少し気持ち悪い。このまま放っておくとあせもになることが予想されるが、まあ外す気はないのでその事については頭の隅において気にしないことに決めた。

手元が暇な僕は先ほど読むのを止めた本を取り出すべく、スクールバックのチャックを開け手をつ込んだ。ガサゴソと音をたてて見えない小説を探すと、ろくに教材も入っていない鞆なので容易に見つかった。鞆から手を引っ張り出すと、黒い背表紙の本がぬつと出てきた。世間一般で黒い文庫本はホラー小説と決まっている訳で、もちろん僕のそれもホラー小説だ。こんな熱い時には怖いものを見て涼もうという事で、僕は鞆の挟まっているページを開けて、先ほどの続きを目で追った。

まだ小説序盤なため怖いシーンはさほどない。主人公の身边でなにか悪い噂が囁かれているような段階だ。ページを捲ろうとすると、自分の手の甲から汗がふきだしているのに気づく。肉眼でも普段より毛穴が広がっているのが分かる。たびたび汗をYシャツの袖で拭いながら僕は本のページを一定のスピードで捲り続けた。決して怖くて汗をかいている訳ではない。汗をかくほど怖い小説があるなら紹介してほしいものだ。単に暑いからである。

そして僕は、数十ページ読み進めた辺りで人の気配に気がついた。

先生かまだ残ってる生徒の誰かだろうと思いつつ黄ばんだホラー小説から目を上げると、二十メートル先の自動販売機の前に車椅子の女生徒がいた。たしか一年生だった気がする。前に一学年の教室のある廊下を歩いている時に車椅子の生徒を見かけたことがあったからだ。この学校唯一の車椅子の生徒なため記憶力の乏しい僕にでも深く印象に残っていた。そういえば下校の際に何度か見た事があった気がする。たしかその時は友達が車椅子を押したりして付き添っていたようだが、今は何故か一人だった。改めて意識してみると、彼女はとても小柄だった。動物に例えるのなら子リスが一

番近いのではないだろうか。

そんな彼女は車椅子であり運動をしていないためか、体全体が細く派手に倒れれば大怪我をするんじゃないかと思うほどだ。性格は大人しそうな印象。髪は黒い髪のもでセミロングだろうか。僕にはセミロングの基準なんてもの良く分からないが、とりあえずそういうことにしておこう。制服は規定通りしつかりと着用されているため、見たところ真面目そうな生徒のようだ。とりあえず僕の簡潔な人間分析が終わる。

じつと観察していると、彼女は（おそらく）ポーチから白い長財布を取り出した。そして抜き出した千円札を自動販売機に入れた。その手がどうもぎこちない。…すると一瞬間を空けて、野口英世がふてぶてしい顔をしながら自動販売機から帰還してきた。

その事に気付いた彼女は、ボタンに伸ばしていた手を戻しもう一度それを自動販売機に入れた。彼女が少し警戒していると、またそいつは戻ってきた。3回目も例の如く野口英世はお札投入口からぬるりと帰ってきた。

そして彼女はお札を入れることを諦めたのかそれを財布に戻した。そして小銭を入れていた。『小銭あるんかい！』と、えせ関西弁を使いつつ心の中で突っ込む僕がいた。

いつの間にかページを捲る手が止まっていて、彼女の行動を追うことに集中している事に気づく。彼女はほっそりとした腕をボタンに伸ばした。腕を上げた事に事によってYシャツの袖が捲れる。そこから白い二の腕が覗いた。別にドキリとはしてないぞ。もう一度言う、ドキリとはしてないぞ…おそらく。

やはり運動はほとんどしていないようで、こっから見た感じでもあまり肉がついてないことが分かる。元々細いのかもしれないが、どこかに思い切りぶつければ折れてしまいそうなそんな気がした。

ここで少し違和感。彼女はなにやら腕を思いつきり伸ばしていた。僕のいるベンチからでも分かるほどに、右手の指先がピーンとまっすぐ伸びているのだ。しかしその指は欲しいだろう飲み物のボタン

にわずかに足りてないなかった。というかあの飲み物はなんだ？
…ん。甘酒？^{あまさけ}なんでそんなものがあるんだ。僕は初めてその存在をした。そもそもなんでそんな物があるのだろうか。まるで生徒に飲酒を推奨しているようではないか。いや…でも甘酒のアルコール度数なんて1%ぐらいなわけだし、たかが甘酒のわけだし…。色々想像した挙句、僕は考えることをやめた。

^{さまよ}彼女は勢いをつけボタンを押そうとしていたが、その手は中空を彷徨っているだけでボタン下の何もないところを押していた。彼女の必死さは後ろ姿からでも窺えた。なんだかさっきの野口リターンズといい、今のこの状況といい、だんだん彼女がかわいそうに思えてきた。もう少し見ていたいという気持ちもあつたが、そうもいかないみたいだ。僕の良心が痛む、始めからそんなものなんて無いのだけれど。

僕は読んでいるページのところに琴を挟んでベンチの空いているところに本を置いた。さっきまで本を曲げて読んでいたためか、表紙がピロンとなっていた。言って意味が分かるだろうか。そして今まで座っていたベンチから、僕は重い腰を上げた。

ポケットに音楽プレイヤーをしまいながら彼女の元に歩み寄った。中庭は変わらず閑散としており、僕たち二人しかいなかった。さっきまでヘッドフォンごしでも聴こえていた蝉の鳴き声は僕の耳には入っていなかった。

カッソ。カッソ。——いつからだろう？僕がこうやって独りになる事を好むようになったのは…。

カッソ。カッソ。——初めからだっただかもしれないいし、そうでないかもしれない。

カッソ。カッソ。
なぜ僕が自分から足を踏み出して、この車椅子の女生徒に歩み寄っているのかはよく分からない。それを聞かれれば「なんとなく」と答えるだろう。その程度の気まぐれだ。

でもそうじゃないのかもしれない。

彼女は足音で気づいたのか、僕が後ろまで来た辺りで首を勢いよくぐるっと回した。後ろを向いたと同時に彼女が一瞬何かを口走ったような気がしたが、僕はとりあえず先程彼女が手を伸ばして押そうとしていたボタンを押した。直後、ガコンという音と共に、取り出し口に甘酒と書かれたスチール製の飲み物が出現した。今気付いたがHOTだった。季節的に需要があるのか？と疑問に思いつつ、それを腰を屈めて手に取った。僕はそれをキョトンとした表情の彼女に差し出した。それを受け取った彼女の口がまた動いたが、読唇術など心得ていない僕にはなんて言ったのか分からなかった。少し彼女は困惑気味な感じがしたが、役目を終えたとばかりに僕は体の向きを180度反転させた。あまり関わるのもあれだと思い、僕は何も言わずその場を後にしてベンチに戻ろうとした。

が、体が何かの引力に引っ張られた。後ろを見ると車椅子の彼女が僕のYシャツの裾を、ちゃんと引っ張っていた。そして残ったほうの手を口元に添えて軽く俯いている。その仕草がなんというか、とても可愛かった。……いや決して勃ってないですよ。息子とか反応しませんから。ただこういう状況初めてなもので。

僕はヘッドフォンを耳から外して首にかけた。すると彼女のたと

たどしい声が耳に入った。

「あ…あの、買おうと思ってたのそれじゃなくて…こっち…です」

点

点

点

まる

『ですよ〜』という言葉が僕の頭の中で反芻する。^{はんすう}そりゃこんな暑い中、こんな可愛らしい女子高生が放課後に一人でHOTな甘酒なんて買いませんもんね。目の前では彼女が申し訳なさそうに別の飲み物を指差しているが、目から入ったその情報が頭でうまく処理されていない。今頭の中では人生で最大の罪悪感が現在進行形で増大中だ。良いことをして何事もなく立ち去るという、漫画の主人公のような事をするつもりが、とんだ失態を犯してしまった。僕はこの瞬間現実とは本とかがようにうまくいかないことを悟った。今の僕は人様のお金を無駄に使ってしまったとか、罵声^{ばせい}を浴びさせられていないだけマシ、とかそういったことを考えられないでいた。完全に冷静さを失ってしまっている状態だ、こうなってしまうと発する日本語すら危うい。

「…ごめん」…って違うだろ。もっとしっかりと謝るべきだろ。あ、え、うん？何を喋ればイインダ？

頭はまったく使い物になっていないが、唯一正常である体で弁解を試みる。とりあえず手をバタバタと横に動かす。ついでに首も横に振ってみる。結果意味が分からない。一瞬思考が回復した僕は、とりあえずお金を返すべく後ろポケットに入れてある財布を手をを突っ込んで取り出した。それに気付いた彼女があわてて言う。

「えっ、あ、いや、お金とかいいですから。大したことありません。そんな気にしなくていいんで。でも私、急に甘酒飲みたくなってきたなあ」

最後のほうが完全に棒読みだったような気がした。

「いや、でも120円だってがお金はお金でしょ。ほんとごめんなさい」

「ほんとに大丈夫ですんぞ！」彼女が手をブンブン振った。僕も相変わらず手を振っているため、傍^{はた}から見れば奇妙な光景であろう。

そんな事を数回繰り返したが状況は変わらなかった。もはや彼女の方は拒絶に近いものになってきている。このままだとずっと無限ループを繰り返しかねない気がしたので、僕はとりあえず会話を途切れさせた。そして半ば彼女の制止を振り切るような形で、先程彼女が指差した飲み物を購入した。さっき買った時と同様に、またガコンという音をたて飲み物が現れた。

飲料名：ドクターペッパー。一部から絶大な支持を受けているが、あまり好きな人はいない。ほんとにこの学校の自動販売機はどうなってるんだ。改めて見ると、需要のなさそうな飲み物ばかりだった。「じゃあこうしないかな？ その間違えて買った飲み物とこのドクターペッパーを交換って事で……」我ながらまともな事を喋った気がした。

「交換ですか……。まあそれなら」

彼女は納得したような顔で頷き、甘酒とドクターペッパーを交換した。分かり切ったことだが甘酒はやっぱり温かった。

この時僕の心臓は今までにないくらい全身に向けて大きく脈打っていた。理由は分かり切っている。女の子とこうやって会話をすることが滅多にないからだ。もしかしたら高校に入って初めてかもしれない。否、中学校からだっただろうか。僕は罪悪感とともに彼女に対して恐怖のようなものを少し感じていた。

「あの……大丈夫ですか？ 私あんまり気にしていないんで、そう落ち込まないで下さいよ」

彼女が不意に話かけてきた。甘酒を握りしめた手がピンクと跳ねる。

「すみません…」

居心地の悪くなった僕は逃げるようにしてその場を去ろうと、体の向きを反転させた。するとまた彼女がYシャツの袖を軽く引つ張った。

「迷惑じゃなかったら、ちょっとそこでお話しませんか？」ベンチを指差した。

「え？…あ、うん」

僕は流されるようにして首を縦に振った。この時まだ脳の機能停止中。そしてそのままベンチに向かう。後ろには赤ラベルのペットボトルを膝に置いた彼女が、両手で器用に車椅子を動かしてついてきた。なぜかとても不思議な気持ちだった。僕がベンチに腰をかけると、彼女はベンチの横にピタツと車椅子をつけた。

「なんか悪いですね。結果的に買って貰っちゃいましたし」

「いいよ。いいよ。間違えたのは僕だし…」

学校のベンチとはいえ、高校生の男女が二人つきりでお話をしていっているという状況が、僕にはいささかきつかった。もしこの場所を誰かに見られたら変な噂をされるんじゃないか、とかいった妄想を繰り返していた。相手のことを考えてというわけでない。僕は保身的で、結局自分のことしか考えていなかった。

「でも、あれですよ…。私がボタンに届かなかったから、それを見て押してくれたんですよね？」

彼女は続ける。

「それってとつてもすごいことですよね。今時そういう優しさっていうか…なんていうか、そういうことしてくれる人とかっていない」

「違う」

彼女の言葉を遮り、僕は鋭く言った。それはとても短く発せられ、一瞬空気を固まらせたかのように思えた。

「違くないですよ。だって」

「だってとかそういうのじゃなくて違うんだよ。僕の優しいなんてものはまやかし、気のせい。例えを出すとすれば、もし君がどこかのお店に入ったとする。そしてそこで探しているものが見つからない時に、それを察した店員さんが優しくその場所を教えてくれる。

…僕のやってる事はそんなことなんだよ。ましてや僕何か、その教える場所すら間違ってるわけだけど」

こういう時に限ってすらすらと言葉が紡^{つむ}げる。考えてもいないのに、口が勝手にそう動いた。暑さで僕の頭はおかしくなったのだろうか？違う。僕の頭は元々おかしいんだ。こんなどう見ても人畜無害そうな可愛らしい女の子に対しても、拒絶の言葉を投げかける。もはや逆ギレに近い。

「私はただ、優しいって思ったからそう言っただけです。自分をそんな風に言わないで下さいよ…」

「僕から言わせてみれば君のほうが十分優しいよ。放課後に一人でボーツとしているような気持ち悪い奴と一緒に話してくれてさ」

また僕は自分を蔑^{さげす}む。考えれば考えるほど自分を卑下^{ひげ}することしか思いつかない。長い事こうやって人と会話をしていなかったせいなのか、僕の感情は濁流のように流れ続けていた。

「だからそうやって自分を悪く言わないでくださいよ。あ、さっきの事とか気にしてるんですか？それなら私は全然大丈夫なんで。ほんと」

少しオーバーリアクション気味に彼女は体を使い言い表す。

そして何を思ったか、彼女は膝に置いてあるドクターペッパーの蓋を開け、口に付けた後にそれをぐいっと傾けた。その角度ほぼ90度。ペットボトル内にボコボコと気泡が流れ込む。そして一気に半分ほど飲み干した。とても喉が渴^{かわ}いていたんだろうか。しかし何故このタイミングなのだろうか。

「とりあえず、そういうことは置いといて」

見えないなにかを右から左へ移動させる動作をした。そして一息

ついた後、彼女から突拍子もない言葉がでた。

「えっと…お趣味は？」

何かの気遣いだろうか？急に話のトーンが変わり、お見合いのよ
うな雰囲気及早変わりした。

「趣味ですか？なんだろうな…」

一応真面目に考えてみる。さっきまではすらすらと言葉が出たの
に、こういうの時は頭をフル回転させない限り会話が続かない。

「読書を少々…」

「そうですか。本の方は特にどういったものを？」

「もっぱらホラー小説ですね。特にそういった短編ものが好きです。
あ、でもたまにミステリー系も読んだりするのかな」

好きな事の話のせいかまともに喋れた。というか間髪入れずに答
えてしまった。さっきまでの負の感情を抱いていた僕がいつの間
にか影を潜め始めている。

「私は小説とかってあんまり読まないですよね。ホラーとか怖い
のもちよつと苦手で。そういえば音楽も好きなんですか？」

「音楽？」

「はい。ヘッドフォンとかしてるし、よっぽど好きなのかなあ、と
僕は首にかかっているヘッドフォンに手をかけた。さっきまでま
るで気にしていなかったが、ずっと音楽鳴り続けている事に気づく。
「音楽は好きですよ。けど最近の曲とかはあんまり分かんないかな」
「そうなんですか。私も最近の曲とか分かりませんよ。ちなみにど
んな曲とか聞いているんですか？」

彼女の顔がぱあっと明るくなった。遠くで眺めていたより近く
の方がなお一層可愛かった。そのためか少し緊張する。

「70年代ロックとかそういうやつを…」

「へえ…それって何年前ですか？」

そりゃ70年に決まってるだろ。ってあれ？違うか。今2010
年だから40年ぐらいか。この娘は天然さんなのか？

「…そっちってどついうの聞くな？」

彼女の質問を華麗にスルーしつつ質問を質問で返す僕。

「石川さゆりさんとかかな。あれですよ、津軽海峡とかの」

「へ、へえ……」

何故演歌？古いとかそういう問題じゃないぞ。そりゃ国民を代表する演歌歌手だし、そりゃ分かるけどさ。話せば話すほど彼女のキヤラが掴めなくなってくる。

このままだと話がずっと噛み合いそうにないため僕は話をすりかえた。

「そういえばなんでこんな放課後に飲み物なんか買ってたの？」

「ちよつと喉が渴いたんで」

たしかに喉が乾いたら飲み物を買うだろう。正論だ。

「あと、今日つてひとり？いつも友達と一緒にだった気がしたけど」
彼女の表情が一瞬固まる。さっきまでの笑顔が3割ほど減少したような気がした。僕に至ってはほとんど笑顔なんて作れてない訳だけど。

「その…色々あって。…あ、そうだ」

なにかを思いついたようだ。ついでに手をぼんと叩いている。動作が少し昭和チックだったが、可愛いからよしとしよう。

「もしよかったら…一緒に帰りませんか？」

皆さん。この気持ちがお分かりになられるだろうか？某古本屋で本を購入する際、経済面を考えて100円で何冊か本を買おうとした。レジで会計をしようとした時に、その事実気づいてしまう。100円の値段の本の中に1冊250円が混じっているということ。そういう事態を経験した事の無い方でもこういう時に咄嗟に出る言葉って大概決まってますよね。

では、手短かに言ってみましょう。さんはい。

「は？」

第1話：マジでミスする5秒前（後書き）

数話程度書き溜めているので、しばらくは安定して投稿出来るかと思えます。

第1話もそうですが、一話分の長さが安定しない事が多いかもしれません。

もしかすると誤字や脱字があるやもしれませんので、発見した際はコメントして頂くと助かります。

では、スローペースながら話を少しずつ盛り上げていこうと思います。

blog <http://uyumatтари.blog.shinobi.jp/>

××ストーリーは突然に

いつもと変わらぬ通学路。時間も時間なだけあって学生の姿はあまり見られない。黒いジャージを扮してジョギングするおじさんと、団地の前で井戸端会議を開いているおばさんの3人だけが今視界に映っている。時間は今4時ぐらいだろうか。夏の日差しはまだ衰えを知らないらしい。歩くたびに汗が噴き出す。汗が額から顎に伝わって無機質なアスファルトの地面に落下する。おまけに額に髪の毛が張り付く始末だ。額の汗を拭いたYシャツの袖が透明に透ける。背中は尋常じゃないほど汗をかいており、Yシャツがしつかりと張り付いている。このまま涼しいところに入ったら気持ち悪いんだろ una、と想像しながら僕は足を進める。珍しく今日の僕はヘッドフォンを耳に掛けていない。首からぶらぶらと下げているだけだ。ついでに言うと、今日は一人での帰宅ではない。

聞いてくれ。ありのままに今起こった話を話すぜ。『僕はさっきまで学校の中庭で車椅子の女生徒と話していたと思ったら、いつの間にか僕が彼女の車椅子を押して下校している』な…、何を言ってるかわからねーと思うが、僕もなにが起きているかわからなかった…。頭がどうにかなりそうだ。催眠術とか記憶喪失だとか、そんなもんじゃ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

…という風に、怪奇的な何かによってこうなつたと言いつたかったがもちろんそんな訳はない。僕は自分の意思もろくに持てず、彼女に流されて結果的に一緒に下校している。そして僕が後ろから彼女の車椅子を押している訳だが、どうもぎこちない。こうやって車椅子を押す経験がないのもたしかなんだが、これは緊張によるものだった。何度も言うようだが僕はあまり人と会話をしない。こうやって女子と二人きり帰宅する事なんて初めてだ。物心がついてない

時はそういうことがあったかもしれないが、ノーカウントだろう。さつきから歩き方すら危うくなってきた。僕からどうにか話しかけてみようと思ったが、うまく喋る事ができない。結局彼女の話を一方的に聞くような感じになっている。そしてその話から色々な事を知った。

どうやら彼女は友達と喧嘩をしてしまったようだ。放課後一人でいたのはそのせいだそう。喧嘩をした詳しい理由はあまり話してはくれなかったが、簡潔に説明すると休み時間にその友達とちよつとした口論になって、それが喧嘩に発展してしまったそう。よくありがちな原因だ。いつも仲良く彼女に付きつきりであるため、友達がいないと何かと不便だそう。ようするに今の僕はその代理。駅まで帰り道が同じという事なので、僕はそこまで一緒に帰る事になった。普通に歩けば学校から10分程度の道のりだが、今日は車椅子を押しながらでの帰り道のためどのぐらいかかるかはまいち検討がつかない。学校のHPにも、『駅から徒歩約10分。また車椅子引率の場合〇〇分』とそんな都合よく書いてあるはずもなく、いつもの倍ぐらいはかかるだろうと見立てをたてた。

そしてこうやって一緒にいる事で彼女の不便さが良く分かった。ちよつとした段差であつたり坂道であつたり、普通に歩く分なら全く気にならないような些細な事が車椅子では問題になる。彼女の話によると、一人で大体の事はどうにかなるそうなのだが、車椅子を押してくれる人がいると幾分も楽だそうで安心感があるそう。下駄箱の所で靴を履き替えさせるといった召し使いな事をしたが、今思えば履き替える事自体は一人でも出来たんじゃないか?と思った。その時はまだ軽く暴走状態であつたために、そこまで頭が回らなかった。段差がある場所は持ち手をクイッと動かして前輪を浮かせる。初めてやることのため、前輪を浮かす際に車椅子を自体を大きく振動させてしまっていた。最初はそういった動作がボロボロであつたが、次第に慣れていった。

なんの木だかわからないが、2車線の車道に沿うようにして定間隔で木が植えられている。風が吹くたびに葉がざわざわと音をたて揺れる。ついでにジョギングをするおじさんの、ふくよかなお腹も揺れている。歩きたびにたぶたぶと。

今まで彼女からばかり話を振ってもらってばかりいたので、そろそろ僕も話しかければいけないなあと思い、咄嗟に口を動かした。

「ご趣味はなんでか？」

…なんでこうなる。妙に爽やかだった気がしたが、今このタイミングで聞く質問ではなかった。僕は自分のボキャブラリーの少なさに呆れた。

「趣味ですか？…ちょっと待ってください」

車椅子に座る彼女は、頭に手をやって考える。この間も僕の足は着実に駅に向かっていて、車椅子を押し進めていた。

「散歩ですかね…って言っても歩く訳じゃないですよ。あ、あと空を見る事です」

彼女は笑顔を顔に広げて言った。僕の位置から顔は見える訳ではないけれど、なんとなく分かった。それにしても、趣味が空を見ることって。他人の趣味を僕みたいな奴がとやかく言うのはあれだけど、他にやることがないものかな。軽く電波さんなのだろうか。

「空を見る事？」

僕は顔を上に傾けた。そこには絵に描いたような夏空が、どこまでも青く広がっていた。近頃意識して空を見ないためか、とても澄んだ色に思えた。

「はい。…やつぱりおかしいですよ。趣味が空を見るなんて。もっと他にないのかッ、って思いますよね」

「そんな。おかしいなんて」

彼女の自嘲気味な返事を慌てて否定するが、それは嘘だった。内心では少しおかしいと思っている。要するに世間一般で言う所のお世辞というやつだろう。あれ使い方間違ってる？

間を埋めるようにして、彼女が「うんッ」という声を漏らしてぐっ

と伸びをした。その手が僕の胸のあたりぐらまで伸びてくる。

「私、中学校の頃ほとんど病院にいたんですよ。それでほんとにやる事がなかったから、毎日窓から外を見てたんです」

「入院してたの？」

「はい…その、中学の最初の方にちよつと事故に遭っちゃって。ほとんどベットで寝たきりでした。テレビとかもあつたですけど、なんかだんだん飽きてきちゃいまして。結局最後の方はお空ばかり見てたような気がします」

彼女は少し寂しげにそう語った。

その話を聞いた僕は、さっきの趣味の意味が少し理解できた。つまり、趣味がないんじゃないかって何も出来なかったという事だ。だから、空を見ることが好きっていうのも頷けるような気がした。事故の事は…あまり詮索しない方がいいだろう。今の僕では支える事はできない。そう判断した。

「大変だったんだね…。退院したのは高校に入るくらいかな？」

「えっ…と、中学校が終わるくらいですかね。けど私あんまり学校行つてなかったら卒業式とか出てないんですよ。あ、でも、勉強自体は病院でそれなりにしてたのでこうやって高校生になれましたよ」

彼女は僕に背を向けた状態で、腕を天に伸ばしてVサインを作ってみせた。

「けどまだ完全に退院した、っていう訳じゃないんですよ。通院中っていうんですかね、今もまだ月に1、2回ぐらいのペースで通ってます」

「へえ、それって検査とかそういうための？」

話合っていると、さっきまでジョギングをしていたおじさんを追い抜いた。滝のように流れる汗を首にかけた真っ白のタオルで拭き取っているが、汗は一向に出続けている。おじさんの周りだけ温度が確実に上がっているような気がした。

「検査もあるんですけど、基本的にはリハビリですね。で、お医者

さんが言うには、そのリハビリ次第でまたちゃんと歩けるようになるみたいなんです」

「リハビリかあ…。やっぱり大変？」

彼女は急に首をぐるんとこちらに向けた。びっくりして車椅子を押す体が止まる。

「大変つて…そりやもう、つらいつてもんじゃありませんよッ。なにかに？まりながら立とうとするのだつて、腰とかがほんと痛くつて。えっと…そうだ、病院でリハビリのための施設があるんですけど、そこで補助用の2本の木の手すりに捕まって歩く練習とかしたりするんですよ。その専門の人がついたりとかして。あれとかほんとに拷問ですよ？お父さんとかお母さんが『頑張つて』つて言つて励ましたりしてくれるんですけど、ふざけるなッ！、つて感じで。けど期待されるとやっぱり頑張らなくちゃいけないから…つらいとも言えないですよね」

さっきまで元気にお日様を浴びていた向日葵が急に首をうなだれたように、彼女はため息をついた。

「なんか急に愚痴を言つてすいませんね。でも、それが自分のためだつていうのは分かつてますよ。私だつてこのまま車椅子でいるのは嫌ですから…」

彼女の性格がおとなしそうと思つたのは間違いだったかもしれない。いい事があつたら笑う、イライラしたら怒る。そんなどこにでもいる普通の女の子で、心の強い娘むすめのようだ。

「あー…けど誰だつてそりやイライラするよ。もしそれが僕だつたら『どれだけ辛いかわらないからそう言えるんだよ！』とか言つて直接怒つちやいそうだけどね」

僕は車椅子を再び発進させた。この時僕の心は憑き物が落ちたみたいにすっきりしていた。なんだかとても久しぶりに笑えているような気がした。

「…やっぱり優しいですね。そうやって言つてくれる人初めてです」
「だから違つて。けど初めてつて、他に言つてくれる人いなかった」

たの？」

最初ほどその言葉に不快感は感じなくなった。むしろ少し嬉しかった。

「中学校とかほとんど学校行ってないせいで、友達少ないんですよ。今その友達とも喧嘩しちゃってますけど」

なるほど。僕とは『友達が少ない』のベクトルが少々違うようだ。

僕の方は自業自得と言えるが、彼女のは可哀そうという方が正しい。

「僕も友達少ないよ。喧嘩した友達はまたすぐ仲良くなるって」

「ハハッ、自分で言います？…って自分が先に言ったのか。なんか私たち似た者同士ですね」

「そうかもね」

二人で友達の少ない事を笑った。段々と車椅子を押すのも慣れてきたようだ。ぎこちなさが解消されつつある。つまり僕の緊張がほぐれている事を意味する。帰宅するときにこんなに笑ったのは初めてだった。いつもだったらヘッドフォンで周りの音を遮断しながら家路を進むだけである。毎日毎日その繰り返し。普遍的で変わらない日常だったが、今日は特別違うようだ。

「私たちって友達なんですかね？」

彼女が何気なくそう口にした。

「どうなんだろうね。良く分らない」

僕は少し意地悪を試してみた。彼女は頬をぷくつと膨らませ、怒ったような表情こちらに向けた。しかし彼女の表情はすぐ笑顔に変わった。なんだかそのやり取りとてもうれしく感じた。

友達の定義ってなんだろう。とも・だち【友達】親しく交わってくれる人。友人。…つまり仲がいい人っていうことだろうか。それは当たり前か。ちよつとの顔見知りとかだと除外なんだろうな。友達っていうのは、どこからが友達に入るのか境界線が曖昧で定義なんてつけようがないんだろう。僕は深く考えない事にした。

「けどこうやって話してて赤の他人っていう事はないと思いますよ」「たしかにね。これで他人ってのはおかしいね」

こうやって話している間にも車椅子は着実に駅に向かって進んでいる。一人で歩いて帰る時より時間は大幅にかかっている。しかしこうやってゆっくりするのもいいのかもしれない。今日の通学路の景色はいつもと違って見えた。

「友達って事で思ったんですけど、親友はどこからどこまでの事を言うんですかね」

今度はそうきたか、と思いつつ僕は答える。

「親友かあ…漠然としてるけど、なんでも言い合えるような人の事じゃないかな。ほら例えば、『この人にだったらなんでも話せるなあ』っていうような。そんな事言くと僕は親友じゃないんだけどね…」
「そんなこと言わないで下さいよ。私が親友になりますよ？なんてなるうと思っただけなようなもんじゃないんですけどね。…でもたしかに親友ってそういうものなんですかね。だったら私は一人いますね」

「お気づかいありがとね。その親友ってもしかして喧嘩中の？」

「はい。その喧嘩中の人です」

珍しく僕の予想が的中した。今は喧嘩しているとはいえ、彼女が自分で親友と言える人なのだろうからきつとすぐに仲良くなるだろうと安心できた。

「大丈夫だよ。すぐ仲良くなるって」

「だといいですね」

ここで一端沈黙が流れる。今まで途切れずに会話が続いたのが奇跡だなあとその時思った。同時に、ほとんど僕が彼女に対して質問していた事に気づく。

目の前の彼女はぼんやりと上の方を向いていた。今も空を見ているのだろうか。つられて僕も空を見上げた。空には無造作に作られた真っ白い雲がぶかぶかと空に浮いていた。ぼうつと僕も眺めてみた。しかしすぐに手元が狂って車椅子が右に逸れたので、すぐに視線が前方に戻る。

「お空きれいですね」

彼女がぼそつと呟いた。僕はそれに軽くうなづく。彼女に見えて
いる訳でもないのに。

「知ってます？空って、太陽からの光が大気の中の色んなものにぶ
つかって散乱して、青く見えるみたいですよ。あんまり詳しくは知
らないんですけど」

「ああ、たしか青は一番波長が短い光だから強く散乱されるってや
つだったかな」

ここで僕は容量の少ない脳みそから、滅多に使わないような知識を
引っ張り出した。

「わあ、なんか詳しいですね」

「いや。たしか授業でこんなような事をやって、たまたま憶えてた
だけだよ」

「へえ2年生になるとそんなことやるんですね。なんかちょっと楽
しみです」

彼女は嬉しそうな声でそう言った。

「もしかして勉強好きなの？」

「そうですねえ……どっちかって言われれば……そうですね、好き
な方ですかね。病院の方でも結構自主的にやってましたし」

「僕は嫌いだな……。そういえば空ってどういう所が好きなの？」

彼女は空の話をしている時が一番活き活きと話している気がした。

僕はそこはかとなくその話題を振ってみる。そこはなんとなくの意味
を履き違えている感が否めないけど。

「空はいいですよ。見てるとリラックスできます」

彼女は柔らかい口調でそう言った。それに感化されてか、僕の口調
も柔らかくなる。

「ふーん、普段はあんまり意識して見たりしないからなあ……」

「その日その日で、表情が違ふんですよ。今日はきれいだな、とか
……けど、その時の私の気分とかも関係してると思ふんですけどね」

焼き鳥を売っている屋台の前を横切った。今日も白いタオルを頭に
巻いた元気なあんちゃんが、屋台の中から「っらしゃい!!」と威

勢のいい声を上げている。そしてそれに便乗するかのように、やきとりのいい匂いが漂ってきた。そしてその匂いが鼻腔をくすぐり、胃の空腹を知らせる。ここはこうやって釣られた高校生が、ついつい学校帰りにお金を使ってしまう《誘惑ポイント》なのだ。

「病院にいた時もそんな事を考えたりして空を見てたら、あつという間に退院できました。結構時間も忘れられますね」

「ずっと空を見てたらいつの間にかお婆ちゃんになってるかもしれないね」

だんだんふざける余裕が僕も出来てきた。なんでこうやって今まで話したり出来なかったのだろうか、自分に疑問を投げかけてみる。
『…わかりません』。妥当な返事が返ってきた。

「そんなにボーっとしませんってえ」

彼女がぶくつと頬を膨らませた。そしてさぞおかしそうにくすくすと笑った。

駅のすぐ近くの所まで来た。学校の周りとは違い、やや人通りが増えている。そんな中でもやはり僕達は目立った。汗をかきながら車椅子を押す男子高校生と、それに座る女子高校生。傍から見ればカップル同然と言ったところだろうか。

「もうそろそろ着いちゃいますね」

「そうだね」

バス停やタクシー乗り場が見えてきた。タクシーの運転手が、自分の商売道具に背中を預けて煙草をふかしていた。この時間帯はあまり乗る人がいないのだろうか。とても気だるそうに見えた。それに引き換え、バス停にはまだバスが来ていないのにも拘らず、4、5人ほどの人が行儀よくまつすぐ並んでいる。買い物袋をさぞ重そうに持っているおばさんが目につく。漫画とかによくいそうな、時代の流行に乗り遅れたようなパーマをかけている。きつと過去の輝いていた頃に縋るように、今もこうしているんだなあとか想像できた。車椅子はそんな人たちを横切り、どんどん駅に近づいていく。いつもなら階段を上って一直線に行くとところだが、今日は車椅子同行の

ため階段下のエレベーターを使う事になる。そういえば一度もエレベーターを使った事がなかった。僕はそう思いながら、階段を通過してエレベーターの前まで向かった。

「えっと…なんか急にすいませんね。『一緒に帰りませんか』なんて」

「いやいや。元はと言えば、僕が色々失敗したせいだからね」

僕は間違つて甘酒を購入した事を思い出して、少し気分が下がった。そしてその甘酒は学校から今まで彼女の膝の上に置かれていた。

「あ、そろそろ渡しときましようか」

そう言つて彼女は、僕に黒歴史の塊を差し出した。僕はそれを受け取る。…また一つ負の遺産が増えてしまったようだ。

エレベーターの前まで来た僕は、壁に設置されている『→』のボタンを押した。ランプが点滅すると、すぐさま上の階からエレベーターが降りてきた。ピンポンという電子音と共に、扉が開く。僕は段差に気をつけながらゆっくり中に入つて行つた。

「大丈夫ですか」という彼女の問いに短く返事をして中に入ると、すぐさま扉が閉まり密室空間が完成する。ん…あれだ。暗闇だつたり、密室で男女が二人きりになると、ちよつとそういった感情が生まれるというのも今の僕には頷けた。

音をたてて上昇するエレベーターは、1階分しかないとすぐさま到着した。その間わずか4.8秒。

乗る時と同様に、段差に気をつけながらエレベーターから降りると、すぐ右側は改札がいくつも並んでいた。

「なんかあつという間に着いちゃいましたね」

彼女が少し寂しそうにそう言った。

「ほんとあつという間だった。話してると時間が早く感じるね」

「そうだ。もしよかったらまたこうやって帰りませんか？迷惑だったらいいんですけど」

「えっと…」

ここで首を横に振つてしまうと一体どうなるんだろう。僕は少し考

えて結論に至った。

「うん。…また今度」

そう言った直後のの彼女の顔はとても可愛くて、今まで見た中でとびきりの笑顔だった。満面の笑みというより、そこから2割増しの笑顔だった。

少し幅の大きい改札に向かって、まず初めに彼女が改札を通過する。それに続くように僕が改札を抜けた。その横では、ブザー音と共に改札に阻まれている男の人がいた。少し焦ってるのが面白い。

僕が車椅子から手を離すと、彼女は器用にすいすいと車椅子を動かした。

「じゃあ私2番線なので、ここで」

彼女が少し大げさに手を振った。その手はやっぱり小さくって、とても細かった。

「うん。じゃあ…またね」

手を振って僕は自分の乗り場へと足を運ぶ。すると後ろから「また今度」と聞こえたので、後ろを軽く振り向くと、彼女がまた手を振っていた。僕はそれに応えるように手を振り返した。

またね…か…。右手に甘酒という負の遺産を握りしめている僕は、そんな事がちつぽけになるくらいドキドキしていた。言葉では言い表せないような不思議な感情だった。

階段を下りる僕は、何故か少し足早だった。さっきまで慣れない車椅子をずっと押していたせいもあるだろうが、これはきつとそれとは違うのだろう。

駅の構内にはそこそこ人がいて、僕はいつも通り階段を下りて10mほど進んだ所で電車を待った。向かいのホームを見渡すと、まだ彼女の姿が見られなかった。車椅子のため時間がかかるのだろう。そしてタイミングのいい事に、僕の乗る電車はすぐに来るみたいだった。この路線はあまり本数が少ないため、考えないで行動すると結構な時間を待つ事がある。しかし今日は運がいいようだ。そう。

今日の僕は今まで溜めこんでいた運を一気に使ってしまいそうな、そんな勢いだった。

僕は今までの自分を思い浮かべた。

学校でもあまり誰とも関わらずに、ほとんど一人で過ごす自分に。家に帰っても、どこか他人行儀な家庭。思い返してみると、僕の今までの人生はA4のレポート用紙一枚で書き表せられるような、そんな薄っぺらい人生だった気がする。僕の人生はとても密度の低い、色褪せたものだった。しかし今日はどうかだろう。今まで生きてきた人生を全て足しても勝るような、そんな濃い時間を過ごしたと言っても過言ではないのではないか？まるで真っ白だったキャンパスに、原色の絵具を塗りたくったようなそんな気分だ。僕はこんな時間が明日も、そのまた明日も続けばいいと思った。いや、思ってしまった。

すぐ近くの時計に目をやる。どうやら電車はもうすぐ来るようだ。

その前にと僕は右手に持っている甘酒に手をかけて、プシュッと栓を開けた。買った時より冷めてしまっていたが、僕にはそれが何故か温かく感じられていた。そしてそれを口に運ぶ。

口の中でころがすように飲む訳もなく、すぐさま嚥下した。

「…まずい」

その味はなんというか、とても僕にはおいしいとは感じられなかった。しかし、その味が妙に嬉しかった。

線路の脇に置いてあるランプが点滅し、電車が来る事を知らせる。

それと同時に、向かいのエレベーターから彼女がゆくりと出てきた。ホームの縁までやってくると、彼女が僕に気づいてまた手を振った。僕はそれを繰り返す。

線路で群れていた鳩達が一斉に空に飛び立った。どうやら電車の接近を察知したようだった。僕がちらと横を左を向くと、電車がすぐそこまでやってきていた。

こんなちっぽけだけど幸せな時間が少しでも続けばいいと考えた瞬間に、どうやら今まで溜めこんだ運を使い果たしてしまったようだ。

ドン。

短くて鈍い音が僕の耳に飛び込んできた。というより、僕の体がそう感じた。

音に合わせるようにして、僕の体が前につんのめった。慌てて体を元に戻そうとしたが、その勢いに負けて僕は踏みとどまる事が出来なかった。そこからの時間はとてもゆっくりで、一瞬がとても長く感じられた。

僕の体が線路に向かって投げ出された。それはとてもスローモーションのように感じられて、長い浮遊感を感じた。さっきまで持っていた甘酒の缶は、僕の右上辺りを舞っていて、中の液体を中空に飛沫させていた。周りで悲鳴のようなものが上がったような気がした。なんとなく僕は向かいのホームに目を向けた。そこには呆然とした彼女の姿があった。彼女は両手で口を覆っていた。その時僕の頭には、今日の彼女の色めいた表情が走馬灯のように駆け巡っていた。

鳴らされる鮮やかなクラクション。僕にその危険を伝える。全ては

一瞬だった。

僕がまた横を向いた時には電車はすぐ目の前にいて、僕にはもうどうする事も出来なかった。

××ストーリーは突然に（後書き）

という訳で、完結でございます。橘立花の次回作にご期待ください。

…とまあ、冗談ですよ？

まだ起承転結の『起』にすら入っていない状態ですし。

それで今回のお話なんですけど、簡潔に言えばただの『帰宅』ですね（笑）

それと彼氏さんが車椅子の彼女を押して下校…。なんかちょっと口マンチック（？）ですよ？

軽く裏話で。この話を構想し始めたのが、たまたま車椅子の女の子を見かけたからなんですよ。

で、最初はそんな二人の淡い恋心。…みたいな感じで書いていたら、なんか超展開になりました。

えっと…、あとがきとかがグダグダとかで申し訳ありません。

今後もおそらくこんな感じなので、読み終わった際に軽く目を通してもらえれば幸いです。

そもそもこのお話を読んでもらえる事自体がありがたいです。

出来るだけ早い執筆を心がけますので、どうか今後もしろしくお願いします。

第2話：きぐるみ、パンダ、そして神様

見慣れた学校の中庭。耳を劈くような、鬱陶しい蝉の鳴き声。ミンミンだのツクツクボウシだの、どうでもいい鳴き声を延々と垂れ流している。そして木々は暖かな夏風を受け、ざわざわとその身を揺らしている。

僕は、相変わらず放課後のベンチに腰を掛けている。少し前まではそうやって一人で、ヘッドフォンを耳にあてがっては音楽を聴き、小説を開いてはページを捲り続けるという行為に没頭していた。どう足掻こうが、僕には特にやることもない。

しかし、今の僕はそうではなかった。

腰を掛けている木製のベンチの横では、車椅子の君が僕に微笑んでいた。僕の耳にはヘッドフォンは存在せず、僕の手には小説は存在せず、僕の五感には彼女だけを感じていた。そんな僕達は、他愛のないような会話でも声をあげて笑い合えた。彼女が優しくしてくれると、不思議と僕も優しくなれた。彼女がどこかに行く時は、僕が彼女の車椅子を押した。

そんな、変わらぬ日常だった。楽しい日常だった…はずだった。

気付かぬうちに、僕らの世界は崩壊に向かっていた――。

「空って不思議だね。なんていうのかさ…僕達の言ってる空って言うのはもつと高いところにあるのに、蟻とか小さい生き物達からすれば僕達の頭とかはすごい上空にあるように見えるんだろっね。えっと——つまりさ、空って言うのはどこからの事を言うのかっていうのは、その人の意識次第なんだなっ…て」

「ああ——言われてみればそうですね。あんまりそういうの考えた事なかったんですけど、空ってたしかに人によって指してる所が違うのかも…」

「おかしい話かもしれないけど、僕がこうやって踏みしめてる地面から少し上はもう空なのかもね」

「ハハハッ、おもしろですね。自分より空が下にあるなんて。じゃあ、ジャンプしたら空を『飛』んでるっていうんですかね？」

「うーん…それはなんか違う気がするなあ。どっちかって言うと、空を『跳』んでるって方じゃない。ほら、漢字違いでさ」

「ああ…日本語って難しいですね」

「けどさ、一回ぐらいは空とかを飛んでみたいよね。スカイダイビングでもなんでもいいから」

「私は……興味はあるんですけど、なんか少し怖いかなあって」

「そう？たぶん飛べらすごい気持ちいい気がするんだけどな…上空8000mの世界から地上に向かって急降下。きつとそんな高いところから見た世界はそれはそれはちつぽけに見えるんじゃないかな」

「急に語りますねえ。確かにそんな高いところから見たら、町とか人ってほんとにちっちゃいんでしょっね」

「そしてスカイダイビング中にアクシデント発生。上空6000mでパラシュートが開かなくなり絶体絶命！みたいな」

僕がそう言つと、彼女は口をとがらせた。しかしそれはほんの一瞬だ。彼女の朗らかな表情が会話をさらに弾ませる。

誰もいない放課後の中庭。空には小さな鳥たちがぐるぐると集団飛

行を続けており、まるでこの中庭を監視しているかのようだ。

あの日以来―――僕は放課後という短いひと時を二人で過ごしていた。

「あ、そうだ。ずっと聞きそびれてたんですけど、あなたのお名前って何ですか？」

「そうだ。そう言えばまだ僕は名前を名乗っていなかった。名前すら知らないで、良く会話が続いたものだ。そして僕は口にした。

「僕の名前は　　だよ」

「…えっ？何ですか？」

聞き取れなかったのだろうか。何気なく言葉を繰り返す。

「だから、　　だよ」

「……………」

おかしい。自分の名前を喋ろうとしているのに、うまくそれを言葉に出来なかった。というか……………あれ、そもそも僕の名前ってなんだっけ。

だんだん意味が分からなくなってきた。なんで僕がここにいるんだろう？なんで僕は彼女と話しているんだろう？なんで僕は座っているんだろう？なんで僕は僕なんだろう？なんで僕は生きてるんだろう？

「アレ…おかしいナ…。僕って誰っけ…」

車椅子の彼女が困惑気味に僕の顔を覗き込んでいた。しかしその表情は、とても心配しているように見えた。

木々が風で激しく音をたて、鳥たちが奇怪な声色で鳴いた。僕の中には色々な音が大音量で反響していた。それは頭に直接殴りかかるかのように、暴力的に脳みそを掻き混ぜた。僕は頭を抱え込んでベンチに横たわった。

頭が破裂しそうに痛くなった。僕は何かに助けを求めるかのように無我夢中で手を伸ばす。痛い痛いイタイ。僕は激痛に身悶えた。

一体どれくらいだろうか。1分だろうか1時間だろうか。僕はとてもなく長い時間そうやって苦しんでいた。しかし、その終わりは唐突にやってきた。

ぴた。

全ての音が一齐に止んだ。頭の痛みが引き、さっきまでの爆音が嘘のように消えたのだ。声が消え、気配が消え、存在が消え、まるで空気までもその動きを停止してしまったような。それは恐ろしいほどの静寂で、世界がすべて止まってしまったんじゃないかと錯覚する。

僕は周りを見渡した。隣にいる彼女が、先程と同じ表情のまま微動だにしていなかった。空を飛んでいる名前の分からない鳥たちが、同じ場所で停止していた。時計の針はその動きを止め、4時36分50秒を指し示していた。ゆっくりとだが、確実に今起きているこの状況を把握した。

ベンチから体を起こす。錯覚ではない、本当に世界が止まってしまっている事に僕は気がついた。

そしてその静寂をぶち壊すかのように、どこからかともなく陽気な女の子の声が聞こえたきた。

「ハロー、ハロー。今日もあつつい天気だねー。キミもそう思わない？ いッ？」

声の主の姿を求め、目をキョロキョロ動かしだ。右には動きを止めた彼女、左には空虚くうきょな空間。…出来ればスルーしたいところだったが、僕の目の前にそいつはいた。

そいつは見るからにふざけた格好をしていた。身長は150cmぐらいで、県のマスコットキャラに似そうなパンダのきぐるみを着ている。それもニコニコと微笑んでいた。パンダの耳がだらんと垂れているのは、チャームポイントなのだろうか。正直なところあまり可愛くはない。

そしてきぐるみといっても顔だけは出せるようになっていたみたいだ。簡単に説明するならば、パーティグッズとして見かける、全身タイツと言ってもおそらく差異は然程さほどないだろう。もつとまとめるならエ・ちゃんだろうか……。なんか完全にかき離れた気がした。

僕は全身に向けていた視線をそいつの顔にやった。年齢は年下だろうか？しかし見方によっては、年上にも見えた。年齢を断定する材料が少ないと言えはそうなのだが、それはただのいい訳でしかない人を見る目は人生経験によって培われるものらしいが、17年程の歳月で得られたものは正直男女の区別ぐらいだ。

そして驚く事にそのパンダのきぐるみから唯一露出している顔は、テレビ番組に出演するようなアイドルに負けなぐらいとても可愛らしかった。目元がぱっちりしていて眉毛が長く、すこしふつくらした顔をしている。ふつくらと言っても、顔は小顔であって決して大きい訳ではない。なにより全体的に顔が整っており、化粧をしないでも十分な顔立ちをしていた。現に彼女は化粧はしていないようだった。

そうやって目をぱちくりさせながら慣れない人間観察をしているとまた彼女の陽気な声が飛び込んでくる。

「そんなにじーっと見てどうしたのさ？…あつ、まさか僕様ちゃんに見惚とれてたな」嬉しそうに彼女がニヤニヤとした。

見惚れてはいなかったが、美少女とい事に関しては否定しない。しかし誰だって、こんなパンダのきぐるみを着た少女が、いきなり目

の前に現れたら何も言えなくなるだろう。

少女はニコニコと笑いながらふんぶん鼻歌を歌っていた。なんの曲かはまるで分らなかった、というかそれ以前にメロディが崩壊していた。

「あのさ…」

「うん？なんでもいいよ。なんてったって、僕様ちゃんは心が寛大だからね」

うまく言葉が出ない。知ってどうという事はないが、第一にこの子が何者なのか突き止めなければいけない。

「君って…その…誰なの？」

今一番知りたい率直な意見だった。そして彼女は、待ってましたとばかりに両腕をぶんぶん回し始めた。

「知りたい？…そっか、知りたいかあ」

彼女は「コホン」と一度仕切り直してから名乗り出した。

「僕様ちゃんの名前は、百^{もも}。……ま、正直名前なんてどうでもいいんだけどさッ。一応この世界で言うところの《神様》ってやつだよ」

ぶんぶん回していた手をピタツと止めて、某ライダー初期の変身ポーズみたいな恰好でセリフを決めた。

どこからともなくヒューという風が吹き抜けた気がした。おまけに枯れ葉がカラカラ流れる音が聞こえる。

あー、はい神様ですか。そうですか、ありがたや……じゃなくて、なんだこの子は？頭がおかしいのだろうか。と言っても、こんな恰好をしている時点で頭がおかしいのは確定してる訳で、ここまできるとおかしいというよりイカれているというのが正しい。

余談なのだが、この時は名前が『もも』なのか『モモ』なのか『桃』なのか分からなかった。だが後に『百』ということを知った。最初の時点では僕に百という漢字の選択肢はなかった。なにしろ、国語の成績が10段階評価で4なものでして。

「えっと…百…さん？もしかしたら聞き間違えたかもしれないので、

できれば最後の方をもう一回言ってもらえませんか？」動きを止めた彼女に、丁寧に復唱要求した。

バッタライダーのポーズをやめた百と名乗る少女は、たつぷりと間を空けてから、ゆっくりとした口調で言った。

「……………私は神だ……」

「お前だったのか」

つい乗ってしまった。僕は口には出さなかったが、この子絶対お笑いか好きだろ、と心の内で思った。

また辺りがしんと静まり返る。普通のステージならここで爆笑ものだが、もちろん笑う者などそのままの意味でいない。というかこんなパンダのきぐるみを着た美少女がいる時点で、十分に笑いがとれる気がする。イロモノ芸人とか一発芸人にみなされて、早々にお茶間から去るだろうが。

「暇を持て余した、神々の——じゃなくて。僕様ちゃんがかここにきたのは、こんな茶番をやるために来たんじゃないんだよ。あ、ちょっと待ってて」

僕から一定の間隔をとって、僕を見据えた。

「ふ~~~~~よしッ」

長く息を吐いた後、百はビシッと僕に指を突きつけた。もちろんきぐみるだから、指など見えるはずもない。正確に言うと、白と黒の太い腕が僕の方を向いていた。

「僕様ちゃんはねえ、お前を殺しに来た！……………って、ちょっとニユアンスが違ったかなあ。えっと、お前を消しに来た。…ッじゃないくて、処理しに来た」

あれだけ引っ張ったのにも関わらず、セリフがぐだぐだだった。しかし当の本人は決まったと言わんばかりに、充足に満ちた顔をしていた。

そのため衝撃はあまりなかったが、どうやら僕は殺害予告をされてしまったようだ。衝撃自体はあまりなかったのだが、だんだんと僕の頭が正常に物事を処理しきれなくなってきた。

「…そんなことや顔して言わないでくださいよ。えっと…つまり、その……どういことですか？」

「あれ、な〜んか反応薄いなあ。なんでえ？」

いや、なんでと聞かれましても。どちらかというと、僕が反応に困った。

「う〜ん…そっか、あれだ。キミは自分の状況が分かってないんだね」

そうかそうかと、最初に立っていた場所を軸にしながら、百はてくてくと歩き回った。

「どうせ口で説明しても分からないだろうし、再体験させてあげよ。人間で2回も体験できるなんてすごい貴重なんだからな〜」

百は同じ歩調でてくてくと歩みよって、僕の目の前で静止した。あらためて近くで見ると、彼女はとても小さかった。それは、僕がベンチに座った時の身長とあまり大差がないほどだ。

まじまじとそうやって見つめていると、百が僕の頭をガシツと両手で掴んだ。というより、不格好な手が僕の頭を挟んだ。そして意外にもきぐるみの手の部分が柔らかい事に気づく。本物のパンダは結構剛毛だったような気がするがと考えたが、そこまで凝つてくると恐らくきぐるみでなくなるだろうと、その考えをかき消した。

そして百のニコニコした顔面が、ずいっと僕の顔に寄せられた。途端にあまい吐息が僕をくすぐる。その距離、直線距離にしてわずか5cm。あともう少し顔を寄せれば、唇と唇とが触れ合ってしまうような距離だった。そして近くでも見ても、当然のように彼女の顔を可愛いかった。この状況に直面したのが初つづな男子高校生なら、おそらく赤面ものだろう。

百と目が合うと、その口が滑らかに動く。

「ん、どしたの？顔が真っ赤になってるよお〜？」ヘッヘッへ、と悪人すらでニヤついた。

ごめんなさい…どうやら僕は初な男子高校生に該当するみたいです。ほんとにお恥ずかしながら。

「よし、じゃあ行ってみよう」
百が僕に頭をくつつけると、視界は電気が落ちてしまったかのように真っ暗になった。

僕は、駅のホームにいた。正確に言うのであれば、僕がそこにいたホームの壁側に自分が立っていて、対極の線路側にもう一人の僕が立っていた。

「やあ、なんか思い出したかな？」
声をした横を見ると、相変わらずパンダの格好をした百がそこにいた。

「思い出したか？ って言われても…… すいません。ちょっと頭を整理させていいですか」

僕は冷静さを取り戻すべく、今までで起きたおかしなことを大まかなながらも順に並べていった。

まず車椅子の彼女と話をしていたら、頭にとてつもない激痛が走り、急に時間が止まった。そしてパンダのきぐるみを着た、《神様》と名乗る電波系不思議パンダ美少女『百』が登場。そして彼女は僕を殺しに來た殺し屋らしい。話の意味が分からないまま、僕はその後純情を弄ばれて今に至る、と。一部修正が入ってる気がするが、こうやって考えてみると、ものすごい怒涛の展開だということを改めて思い知らされる。映画や漫画等では、日常的にありそうな展開だが、まず僕の知ってる神様はこんなおかしな格好をしていない。ましてやパンダという既存の生物のきぐるみなど、着ているわけがな

かった。結論付けるのであれば、頭のおかしい美少女ってところだろう。…現実逃避に他ならないのだけれども。

結局僕は冷静さを取り戻す事が出来なかった。

「ほら、もうすぐ決定的なシーンだよッ。ちゃんと目の前の自分を
見てるように」

言われるままに目の前の僕を見た。もう一人の僕は手に持っていた
甘酒をカシュっと言う音を立てて開けていた。ついでにその僕は、
僕が見た中で一番希望に満ちた顔をしていた。自分が言うのだから
間違いない。

「あ…あの甘酒。…たしかまずかったんだよな」

うわ言のように呟く。目の前の僕が甘酒を口にした瞬間に、その味
がイメージとして浮かんだ。

「それにしても人間の記憶の記憶っていうのは不思議だよね。だ
が、しかし！僕様ちゃんは今までに起きた事を全て憶えていると言
っても過言ではない」

横から邪魔が入った。僕は右耳から入った情報を左耳から器用に通
過させた。

甘酒を飲む僕の姿を眺めながら暫らくすると、人混みを掻きわけて
見覚えのある顔が向かいのホームに現れた。エレベーターからゆっ
くりと現れたのは、紛れもなく車椅子の彼女だった。彼女は電車を
待つために、エレベーターからホームの縁の方に器用に寄っていつ
た。もちろん黄色い線の内側での話だ。そして僕を見つけたのか、
彼女の表情はパアッと明るくなった。あ、ちなみにこれはもう一人
の僕の話だ。

僕はそんな彼女からもう一人の僕に視線を戻した。それと同時に、
目の前にいる浮かれ気分な僕に対して、僕は少し苛立ちを覚えた。
自分に苛立つというのもなんと滑稽こっけいである。僕が感じている苛立
ちは、例えば街中で見かけるカップルに苛立ちをおぼえるのと同じ
ようなものだ。

ようするに、客観的に見れば自分もその対象に値するのだという事

に気付いた。そして気に入らない事に僕は手なんか振っていた。

「な〜んか、キミ…面白いねッ」ずいっと百が顔を寄せる。

「えっ？」

「いや、キミって今自分にムカついてるでしょ？自分がした事なのに、他人事みたいにそう思ってるのが面白くってさ」

…あれ、いつ僕は自分に対して怒っているなんて言っただけ。
僕は今までの言葉を振り返った。

「キミは何も言っていないよ。喋らなくても僕様ちゃんには分かるんだよ。たしか――― そうだ、こういう人の事をサトリって言っただよね」

なんだよそれ。つまり百っていう存在は、ゲームの中で言う所の―――

「チートキャラ！？アハハハハ」

彼女は抱腹絶倒な様子だった。文字通り地面に倒れて、腹を抱え込んで笑っていた。アスファルトの上をゴロゴロとしているが、きつときぐるみのおかげで痛くないのだろう。

「あー…じゃあつまり、僕が何か隠し事とかしようとしても全部筒抜けって事ですね？」

「――― ハハハ、ハハッ…あ、そうだねッ」

彼女はアクロバットな立ち上がり方など見せずに、それはそれは普通な動作で立ち上がった。

「…なんか嫌ですね」

「じゃあこれからは心の中で呟くんじゃなくて、出来るだけ言葉にしよう」

「…精進します」

僕は心のうちが全て晒し出されたような気分になって頂垂うなだれた。外観の丸裸も嫌だが、内観の丸裸も十分嫌だった。考えてみれば、今まで頭の中で《美少女》だの《可愛い》だの連呼していた事も筒抜けだったという訳で、恥ずかしくて死にたいとか言うレベルを通り越して、何も考えたくなってきた。

「あ。はい、ここ注目！」

そんな事どうでもいいという風に、百が鋭く言った。パンダのきぐるみを着たやつの表情が、先程より少しばかり真面目みを帯びたようないきがした。

変わらずホームを挟んでの、僕と彼女のうざったいやり取りが続いていると思っていいたら、その時はすぐさま訪れた。

電車がホームに駆けこんでくるや否や、目の前の僕は急に線路に飛び込んだのだ。

「あぶないっ！！」

慌てて僕は叫んだ。もう間に合わないと分かりながらも。

それは本当に刹那だった。

目の前の僕が線路に飛び込んだ次の瞬間には、空中に投げ出された体が大きな鉄の塊と衝突していた。その音はとても不気味な音で、ズンと辺りに重く辺りに響き渡った。

大人と大差の無い高校生男子の肉体をもってしても、高速で突進してくる鉄の前では紙くず同然だった。いとも容易く吹っ飛ばされた体はそのまま真つすぐ進み、15mほど離れた地点に豪快に叩きつけられた。

すぐに止まることなど出来ない電車は、線路に横たわるその体に向かって直進する。既にだらんとしている体目がけて、電車はガタンガタンと直進を続けた。

そして悲鳴をあげる一般人を余所よそに、電車は勢いよくその上を通過した。その通過する1両がとても長く感じられ、7両目辺りでついにその動きを停止する。ホームに響き渡るアナウンスの慌てようが、事の重大さを分からせた。呆然とその場に立ちつくす青年もいれば、ワーだのキャーだの言って騒いでいるおばさんがいた。既に野次馬も集まり初めている。

僕は線路に歩みよって、今まさに電車の下敷きになっている体を見つめた。見えるはずもないのに、下にいる僕の体がぐしゃぐしゃに

第2話：きぐるみ、パンダ、そして神様（後書き）

この回から、一気にファンタジー色が強くなりましたね。

最初は主人公の自問みたいな感じのお話の予定が、辺の方向に流れて…。

そういえばどこかの動物園にパンダが来ましたよね。名前は忘れてしまったんですけど…。パンダってなんか不思議な生き物ですよね。

それと悪いんですが、次回きつと文が長くなりそうです。

何故か気付くと結構書いてるんですね…。

次回でとりあえず一区切りつく感じなので、読んでくださった方は次回をお楽しみに。

きつとカオスですけど（苦笑）

blog <http://uyumatтари.blog.shinobi.jp/>

ガゼルパンチ↓昇天↓転生（今この辺）

気付いたら僕はまた中庭のいつものベンチに座っていた。同じなのはいつものベンチに座っているということだけで、他はいつもと違いすぎた。

世界の時間は止まっていて、目の前には頭のおかしい百という（自称）神様がいます。時間を止めるような某少年誌キャラがいたような気がしたけど、これは現実だ。漫画の世界ではない。

「もう分かったよね？キミが今置かれている状況が」と、腰に手をあてながら百が言った。ぷっくりとした唇がパクパクと動く。

「あの…一つ質問していいですか？」

「うん。…あ、その前に言うておくけどさあ。キミのその喋り方どうにかできないかな？」

「と、言いますと？」

彼女は苦虫を噛み潰したような、あからさまに嫌そうな顔をした。

「それだよそれ、その気持ち悪い敬語」。僕様ちゃんそういうの聞いていると気持ち悪くなるっていうか、鳥肌が立つって言つか…すごい苦手なんだよね。もっとリラックスして話せないかなあ。ほら、肩の力抜いてさあ」

知らない人と急にフレンドリーに話せるほど人間できていないので、僕は敬語を使っていた。しかしそれを指摘されてしまった。

百の歳はおそらく（？）同じぐらいのため、使うと言われればなんとかできなくはない。

「ごめん。…じゃあ聞くけど、僕は死んでるんだよね？けどここは現実でしょ？それとキミは本当に神様なの？」

一つだけ聞くつもりが、一度に聞きすぎてしまった。人は未知のものと遭遇すると、それについて言及したがる生き物らしい。

「そんな一度に聞かないでよ、ちゃんと順に説明するから。それと、

私の事は百^もって呼ぶように」

今までの癖で《さん》とか《君》とか、今まで人に対しては敬称をつけて話していたため、それを急に無くすのは抵抗があった。そもそも僕は女の子の名前を呼び捨てで呼んだ事など一度もない。そういうば百^もっていうのは名前だとしても、名字はあるのだろうか。

「それじゃ、まず私が神様か？って事について話すよ。…はいそうです、私が神様です」

そこまではつきり言われると、そうですかと頷きたくなるが、胡散臭いにもほどがある。

「そう言われても信憑性がないんだよなあ。それと、もうつつこんでいいと思うけど、なんでそんな格好してるの？」

「えっ？そりゃ……可愛かったから」

百はそっぽを向きながら呟いた。そして続けざまに反撃にでた。

「いいじゃん別に、僕様ちゃんの勝手でしょッ。それに、神様がパンドのきぐるみ着てちやいけないうルールがあるの？」

「そんなルールないけど…そもそも神様がこうやって普通にいて事が間違ってるんじゃないですか————」

「じゃなくて、間違ってるんじゃないの？」自分の口調に訂正をいれる。

「う…。けど僕様ちゃんがここに居るのは、キミのせいなんだからな！」

百はしかめっ面を作った。しかし怒っているにもかかわらず表情がなかなか画になっでいて、あまり怒られているような気がしない。「あー、ハイ。じゃあ百は神様っていう事でこの話は一回置いとくとして……僕^のせいって？」

腕組みをしながら「ホントに神様だよ」と言ってる百は、しぶしぶ解説に戻った。

「えーっと…なんの話だっけ…あ、そうだ。僕様ちゃんが見せた過去の通り、キミは死んでるよ。で、キミは死んだにも関わらず、なんでこうやって生きてるのか？って言いたいんだよね？」

僕は頷いた。ベンチの横を見ると、未だに彼女が同じ表情でそこ

にいた。ここまで来ると、止まっているとしか言えない。

「キミが死んでるっていうのはあってるんだけどさ、生きてるって言うのは間違ってるんだよね。そもそもそんなの矛盾してるじゃん？」

確かに矛盾に違いなかった。その両方を満たす存在は現実的に考えればありえない。空想上で考えるとすれば、ゾンビとかはそれに該当するのかな。

「で、キミはゲームでいうところのバグみたいな感じかな。あ、エラーとも言っね。それで、そう言うのが出てくると周りに支障が出てくるでしょ？だから僕様ちゃんがそれを直しに来たんだよ」

ということは、百は差し詰め創造主^{クリエイター}っていうところなのだろう。

確かに神様となんら変わらない。

「バグ？……って、つまりどういうこと？」

なんで分かってくれないんだとばかりに、百々は頭を掻いた。きぐるみだからその動作が少しシユールだった。

「なんて言えばいいのかなあ……。人間って死んだら一回そこで終わる。分かるよね？」

「で、人間が死ぬと、その魂はリセットされるの。そうやって魂はまたこの世に生を受ける———こういう循環の元、世界が廻ってるんだよ」

前者はいいとして、最後は精神論みたい事を説かれた。

「キミはつまり、その狭間にいるの」

「……………」

頭の整理が追い付かない。僕は流れに身を任せる事にした。

「キミ」。喋らなくてもいいと思ってるけど、僕様ちゃんにはキミの思ってる事が筒抜けなんだからネ」

「…すいません」

「で。話を戻すんだけどさあ。———

さっき、キミが生と死の狭間にいるって事は言ったよね？で、ほんととそんなのほっとけば勝手に治ったり消えたりするんだよ。けどね…キミの場合は、こ

うやって残り続けちゃってるんだよね。なんでか知らないんだけどさ」

百は眉間に眉を寄せて、困った顔をした。先程から見ている風景はなんの動きもなく、目の前の神様だけがコロコロと表情を変えていた。

「なんか適当ですね」

「適当って言わないでよ。だからこうやって出てきたんじゃん」

ハイハイと軽くあしらって、話しを続けさせる。

「そこで問題なんだけど…その横の子――」

百が指差した先には、車椅子に座った彼女がいた。やはりピクリとも動かない。

「バグであるキミが、それでもその子と一緒にいたから、段々引つ張られてきてるよ…彼女」

「引つ張られてるって、何にですか？」

ふうというため息をつき、ある程度間を空けてから彼女は言った。
「…死にだよ。キミは今真ん中の存在なの。だから、生きてるモノは死に引つ張られて、死んでるモノは生に引つ張られてるの」

耳から入った情報がぐるぐると巡って、ようやく脳に送られる。

「…それってつまり、僕と一緒にいると…死んじゃうってことです
か？」

ベンチに座っている僕は、車椅子のある方と逆側に体をずらした。
「って言っても、もう大丈夫だよ。時間止まってるしね。…そういえばさあ、キミ口調が戻ってきてない？」

そういえば、また喋り方が敬語に戻ってきていた。体に染み込んだ習慣というものは、なかなか変えるの難しいようだ。

「戻せって言いたい所だけど…ま、いつか。どうせキミ無理だし」
そうだ、と言わんばかりに彼女が校舎の方に歩き始めた。

「こうやって立ち話も飽きるし、ちよっと歩こうよ」

きぐるみを着た百が、短い短い歩幅でてくてく進む。百がある程度進んだ所で、僕は時間の止まった彼女を一瞥してその後を追った。

「で、さっきの続きなんだけどさ。問題はもう一個あるんだよね」

見慣れた学校の廊下を、パンダのきぐるみの女の子が闊歩している。違和感というか、その光景はあまりにも奇妙だった。

「問題ですか…。けど、今更問題が増えた所であり驚きませんよ…」

キョロキョロと校内を見まわしながら歩く彼女は、もののついでのように言った。

「キミさ、あの子と結婚して幸せになるはずだったんだよね」。将来的にはね」

僕の足がその場で止まった。一瞬自分までも、時間が止まってしまったかのように錯覚する。…1、2、3。はい、深呼吸、深呼吸。け、ケツコンンンンンンンン！！！！！？」

自分でも驚くぐらい大きな声が飛び出した。

そしてそれに驚いたのか、目の前の彼女が何もないところで派手にずっこけた。顔面から硬質の床に向かってダイブしている。

「ちょ…いきなり大声出さないでよ！びっくりしたちゃん！」

床に手をついた状態で振り向きざまに彼女が言った。彼女は胸に手を当てて、ハアハアと息をしている。見方によっては一仕事終えて、疲れ切ったパンダのようにも見えた。

「そりゃこつちだってびっくりしますよ。って、なんでそんな事分かるんですか？」

膝をパンパン叩いて立ち上がる彼女が、さぞ当たり前のように言った。

「え？だって僕様ちゃん、神様だし」

…そうでしたね。

「ところで、そういうのって決まってるものなんですか？」

「うん。物事っていうのは必然の上に成り立ってるもので、少しの誤差があるかもしれないけど、大体は決まってるよ」

…そういうものだそうです。

「で、問題はここからなんだけど。その結婚するはずだったキミが死んじゃった事によって、彼女はもうなると思う？」

百はまた同じように廊下を歩きだした。放課後の廊下は、例え時間が止まっていなくても静かだった。

「どうなるって…他の人と結婚するんじゃないですか？」

くるつと向き直った百は、「チツチツチツ」と（見えていないが）指を動かした。

「キミとあの子が結婚することは絶対だったの。そこは揺るぎない必然。で、それがなくなったらって前提で聞いているんだよ」

「え…じゃあ結婚とかしないんじゃない？」

「甘い！！」

僕が言い終わらないうちに、彼女が口を挟んだ。

「彼女が幸せになる事はない、ってことだよ」

「え？」

「幸せって言っても、僕様ちゃんは女の幸せがどうか言ってるんじゃないよ。…そうだ。彼女脚が悪かったよね？」

百は後ろに手を回しながら、首を傾げた。

「あ、はい」

「そう…」

百はまたくるつと向きを変えて歩き始めた。そして何の前触れもなく教室の中に入って行った。僕は彼女に続いて、教室の中に足を踏み入れた。

教室の中には、放課後だからだろうか人の姿は見られなかった。とても閑散とした教室は、年季がはいっているというか所々汚れていた。そして、教室の後ろに椅子が丸くなるように3つ並べられていた。おそらくさつきまで誰かがあそこで雑談なり猥談なりしていたんだろう。…いや猥談は違うか。

しかし他の椅子と机は綺麗に並べられていて、しっかりと清掃さ

れている事が分かる。黒板を見ると、何やら落書きがされている。なにに、『Time waits for no one』？としてその横には顔文字で『ハア（。Д）？』と書かれている。きつと放課後に残った誰かが書いたんだろう。僕は後ろに並べられている椅子を思い返して、そう思った。そして出来ればこれを書いたのがむさい男子でない事を願いたい。甘酸っぱい青春のお話が、ただの酸っぱいだけのお話に成り下がってしまう気がした。

これと言って特筆すべきようなものは何もない教室。そんな部屋の真ん中では、百が机に腰を掛けていた。もちろん机に座っている訳だから、床に脚は届いていない。しかし椅子に座った所で、足が床に届くとも思えなかった。

「彼女はね。この先キミに支えられて生きていくことになってたんだよね…」

百が唐突に語り始めた。教室の中は、窓際まで伸びている木で覆われているため、陽が出ていてもやや暗かった。そのためか、彼女の表情も暗く思えた。

「それで悪いんだけど、彼女の足―――――ずっと治らないよ」

「え……………治らないって…どういうことですか？」

僕は冗談かと思い、百に聞き返した。彼女は割とふざける傾向がある、だから今回もきつとそうなのだと思った。

「そのままの意味だよ。どんなにリハビリしようが、手じゅちゅ…

…手術をしようが治らないって事」

「……………」

百が両手を机につきながら、宙に投げ出されている脚をぶらぶらと動かした。

「運命って言うのは複雑に絡み合ってて、基本的に全部決まってるんだよ。だから一つが狂うだけで全部が狂う。だから僕様ちゃんがここにいるの。小さな亀裂が大きくならないために」

なんとなくだが、やっと僕にも状況が理解出来始めてきた。

「ああ、やっと僕様ちゃんの話し分かってきた？これでとりあえず

「安心だね」

「えっと……じゃあ、僕はこの後どうなるんですか？」

「キミは初めは消すつもりで来たんだけどさ……。うーん……………」

百は目を瞑るや否や、体の動きをピタツと止めた。なにやら深く考え事をしているらしい。また静寂が訪れる。この沈黙が僕には恐ろしかった。何故なら、今日の前で僕の死刑判決が下されるも同然の事が起きているからだ。

時計も何も止まってしまっているため、正確には分からないがそんな沈黙が5分ほど続いた。そして、彼女が僕に質問をした。

「キミは死にたい？それとも生きたい？」

「それはもちろん生きたいです！」

僕は当然のように即答した。大抵の人間はこんな質問をされたら、確実に《生きる》という答えを取る。しかしちよつと前までの僕だったら、もう一つの答えを取っていたのかもしれない。自分の人生に絶望し、意味の分からない世の中に絶望した僕だったなら。

「よし、じゃあそうしよう」

「はい。……………って…え？」

神様というものは一体何を考えているのだろうか。その決断はとてつもなく呆気なかった。

「けど初めに言っておかなくちゃいけない事があるんだ」

百は勢いをつけて、机に座っている状態から飛んだ。ガタンと机が揺れる音が続いて、彼女が着地した音が聞こえた。

「キミは今までのキミに戻る事は出来ないんだよ。どうーゆーあんだーすたんど？」

僕は少し考えた後に首を斜めに傾げた。

「じゃあ説明するけど。キミが元に戻らないのには二つの理由がある。まず一つ目に、キミはこの世の理ことわりから逸脱してるから。キミはチェス盤で言う所の外の存在なんだよ。それと二つ目、それはねー

……」

「それは？」

軽く生唾を飲み込んだ。溜めていうからには何か重大な事のような気がした。そして僕のそんな動向を焦らすかのようにして彼女が言った。

「それは、僕様ちゃんがめんどくさいから」

「ちよつと待て！」

即座に突っ込みをいれた。言葉でとかそういう意味じゃなくて、物理的に手刀をいれた。僕の素早い手刀は彼女の肩の辺りを捉えた。手刀を入れた時の感想は、とりあえずモコモコしていた。

「え」だって、ほんとに色々めんどくさいんだよ？時間戻したり、運命書き変えたりとか。そういうのは自分でやってよ」

「出来ないから言ってるんだろっがッ！」

「うゝ、反抗的だね。いいんだよ？生きるっていうのを取り消して、もう一個のに変えてもさ」

「すいません。ごめんなさい。調子に乘りました」

僕は言い終わると同時に土下座の態勢に入った。床に向かって頭を下げると、妙にカビ臭いにおいが鼻についた。

「よろしい、面をあげよ」戦国武将の声色ごとく百が言う。

その言葉で僕の土下座は終わった。僕が立ち上がると、百が近くまで歩いてきていた。

「そもそもね、キミの存在はもうこの世から完全に消えてるの。だから、この世の生き物は全てキミの事を元々存在していないものと認識してるんだよ。だからそれを元に戻すのは大変なの。…なんとくなく分かる？」

「…なんとなくですけど」

近づいてきた百は、やっぱりとても小さかった。近くにいることでそれを再認識する。僕自体そんなに背が高い訳でもないのに、彼女は僕の胸ぐら이의身長しかない。

「その証拠にさ。キミもう名前が無くなってるとんだよね。思い出せる？自分の名前」

「僕は……………アレ？」

なんだったるうか。名前を思い出さそうとちつばけな頭を動かしてみたものの、霧^{もや}がかかってしまったかのように向に出てくる気配がない。名前、僕の名前。一体どこに行ってしまったのだろう。16年間使い続けていた名前は、いつの間にか忘却の彼方へと消え去ってしまったらしい。

「もう思い出せないでしょ？キミっていう人間はもうとつくに消滅してるんだ。だから僕様ちゃんをキミの事をずっと『キミ』って呼び続けているんだよ。そうだ——人が人でなくなる瞬間って知ってる？それは名前を呼ばなくなることなんだよ。『おい』だの『お前』だの、物のように扱われる時。だから僕様ちゃんはキミに百って呼ばせるようにしてるんだよ。ま、僕様ちゃんは人の形をした神様なんだけどね」

ハハツと笑った彼女は、「ついてきて！」という言葉を残して教室から飛び出した。慌てて僕は彼女の後を追った。

僕が教室から出ると、廊下の遠くの方に彼女の後姿が見えた。パングきぐるみを着た小さい物体は、その体軀^{たいく}に反してとても俊敏^{しゅんぴん}に動いていた。それにつられるようにして僕の足が、回転し始めた。いつの間にか校舎の中には、バタバタという二つの足音が響き渡っていた。

僕が廊下から少し駆け抜けた辺りで、百は姿を消すようにして左に曲がった。階段を上ったのだろう。その足音が上へ上へと進んでいく。

それに続くようにしてすぐさま僕も階段を上りはじめた。横に取り付けられている木製の手すりには目もくれず、1段飛ばしで階段を進んでいく。階段を上がるたびに、コンクリート製の床が冷たく響いた。

2階に到達すると、その廊下には百の姿はない。しかし百のものであろう足音が上の方から聞こえた。僕を嘲笑^{あざわら}つかのように響き渡る足音を頼りに、僕はまた階段を上りはじめた。

3階を上り終えた時点で、あまり運動をしていない僕の体を既に

悲鳴をあげていた。特に膝と脛くるぶしが残念にもパンパンになっている。そして気付けば、足音はまだまだ上へと向かっていた。確かこの上は屋上だった気がする。そういえば僕がこの学校に入学してから一度も足を踏み入れた事がなかった。そもそも屋上の鍵は常にしまっていたような気が――。

そう思った瞬間、上の方から物が壊れたようなバカでかい音がした。僕は「もしや……」という一抹の不安を込めつつ、不穏な音がした場所へ恐る恐る近づいていく。

そして、屋上へと繋がる扉がある場所まで階段を上がった。いや、屋上へと繋がる階段があつた場所に辿り着いた。元々頑丈に作られていなかったのだろうか、それとも古くなって老朽化ろうきゅうかしてしまったのだろうか。扉は取り付けられていた部分から歪むしり取られるかのようにして、屋上の中央の方へ軽く吹っ飛んでいた。いくら木製だからといつてもこんなに簡単に扉が壊せるものなのだろうか。しかも身長150cmほどの女の子が。…あ、大事な事を忘れていた。そういう**百**は神様だった。異常とかそういった類たぐいのものは、彼女の専売特許であつた。

僕はぶち破られた扉から屋上へ出た。初めて見る景色だった。床はほぼ黒に近い灰色をしている。屋上の縁には落下防止用のフェンスが設けられていた。まるでネズミでも出てきそうな雰囲気で、衛生のかけらも感じられない。おそらくほとんど掃除がされていないのだろう。そして何故か、空になったペットボトルや空き缶が何個か捨てられている。どうやって捨てられたのか、僕には知る由もないが、その中に甘酒の缶が混じっている事に少し驚いた。こんなもの飲む奴が学校にいるんだなあ、とその元の持ち主を想像した。きつと天パーで、髭の濃いオッサンみたいな生徒に違いない。僕はそう思った。

「すごい短い鬼ごっこだったね」

百の白黒の背中が見える。彼女は緑色をしたフェンスの上にちょ

こんと座っていた。きぐるみを着ているためか、些いさやか不安定に見える。その投げ出された脚の向こうには、校庭の茶色い地面が広がっている。ボールを奪いあうサッカー部の姿も見えた。

「ッハア…ハア…それでも疲れましたけどね」スタミナゲージが赤に達したため、息が続かない。

外に出ると、中でのひんやりした空気とは打って変わり、もわつとした暑苦しい空気になった。そのせいで、僕の額からいつそう汗が滲にじみ始めていた。

「僕様ちゃん思ったんだ」。たまにはこうやって人間と一緒に何かをしてもいいんじゃないかな…。遠くから一人で世界を見つめてるより、その世界に溶け込んでみるのもいいんじゃないか、ってね」百はフェンスに足を引っかけ掛けて背中を大きく逸らした。その顔がぐるんところらに向く。ちよつとバランスが崩れれば落ちてしまうような、こつちまでドキドキするような態勢だった。

「もう一度聞くんよ。キミは生きたいかい？」

答えが分かり切ったような質問を、再確認のように問いかけた。

ニッコリと微笑んでいる表情は、白と黒のきぐるみを着ていても尚際立って見えた。

そして僕は吹っ飛ばされた扉を通り過ぎ、百に歩みよった。

「もちろんです」

ニッコリとして、百はアクロバティックにフェンスから飛んだ。後ろ向きにくるつと一回転、僕に背を向けてピタッと着地した。そして振り向きざまに僕に言う。

「それじゃあ、キミには新しい名前が必要だね。キミが人であるための名前がね」

「名前…それって僕が決めていいんですか？」

カッコ悪い名前を付けられたんじゃない。堪ったものじゃない。内心そう思いながら命名権を得ようとした。

「カッコいいカッコ悪いかは知らないけどさ、キミに決める権利は無いよ？それと名前はもう決まってるんだよね」

「なんですか？」と聞いた僕は、また心が読まれた…と落胆していた。

「今日からキミは僕様ちゃんの付き人だ。だからそれに相応しい名前を付けてあげるよ」

「じゃあ釘を刺しておきますけど、付き人の《付》と《人》で付人とかはやめてくださいよ」

すると百が口をとがらせて、腕をバタバタさせた。心なしかきぐるみの耳の部分が動いているのような気がした。

「そんな適当な名前にする訳ないじゃん。もつとちゃんとした名前をつけるよ」

「…それじゃあお願いします」

「お願いされました。…っていうことで発表するね。キミの名前は………」

ドウルルルルル、と百が口でドラムロールのまねごとをした。息が続かなくなってきた辺りで、彼女が一呼吸開けた。

「——ジャン…キミの名前は今日から九十九^{つくも}。そして僕様ちゃんの付き人だよ」

僕を指差した百の表情は満足げだった。そして感想を求めるような顔をしていた。

「その……十分安直じゃねえか！」

「不満？じゃあ付人にするけど？」

「すいません。ごめんさい。やめてください」

神様は横暴だ。どうやって僕が彼女より立場が上になる事はない。僕が上手に出ようとすると百はそれを優に飛び越えて、豪快なジャンピングキックで叩き落としかかる。

「僕様ちゃんの名前は百^{もも}。でキミはそこから一引いた、九十九^{つくも}。…ま、ホントは一^{いち}でもよかったんだよね」

「勘弁してください…」

もうこの際名前はどうでもよかった。しかし九十九と一なら、一の方がよかったなあと後々後悔することになった。

「キミは消えていく道じゃなくて、生きる道を選んだ。もしかしたら茨の道かもしれないし、楽園へ通じる道かもしれない。そこで、僕様ちゃんは生きる道を選んだキミに二つの条件を出すことにする」
僕は彼女に疑問の目を投げかけた。というより彼女には僕が喋らなくても言いたい事が分かるようだし、それで察したのかもしれない。

「まず一つ目。あの車椅子の子を幸せにする事。キミは車椅子の子を幸せにする—— 本当はそういう予定調和だったの。ただキミが死んでしまった今、そうはいかなくなってしまった。だから運命の亀裂が大きくならないためにも、生まれ変わったキミがその代わりをしなきゃいけないの。キミからすれば、元々そうなる予定だったからあんまり変わらないんだけどね」

「それと二つ目。—— 正直僕様ちゃんは、世界を傍観してるのに飽きてきてたんだよ。……だからキミには僕様ちゃんを楽しませてほしいんだ。九十九。キミに出す条件は『僕様ちゃんを飽きさせない』っていう事だよ」

中々難しい条件だった。今まで人とあまり関わってきていなかったような人間が、『飽きさせない』なんて事をこなせるのかだろう。しかし百には、いつも誰かと対話する時に感じる嫌悪感のようなものがあまり感じられなかった。神様だからだろうか。いつのまにか僕は神様の存在を肯定していた。

そして車椅子のあの子……そういえばまだ名前も知らない。って、アレ？……良く考えてみれば元々運命が決まっている事に対して違う事をしようとしてる訳だろ……。これって運命を変えてるんじゃないか？僕は不安になった。

しかし僕は彼女の条件を飲む以前に、まず断る理由がなかった。というかその権利すらなかった。

「分かりました。……努力します」

僕は素直にそれを受け入れた。

それにしても、なんでそれが僕なのだろうか。今までそういう人

間はいなかったのだろうか。そして、彼女は今までずっと一人ぼっちだったのだろうか？

僕がそう心で思った事は、彼女にはきつと分かっているんだろうけど、それについての答えが彼女の口から告げられる事はなかった。「じゃあキミは今から生まれ変わります。…で、悪いんだけどちょっと上向いててね」

彼女に促され、僕は上を向いた。やつぱりそこには大きな空が広がっていて、ぽつんと太陽が転がっていた。そして屋上から見た空は、いつも見ている空よりすこし近くに感じられる様な気がした。「じゃゝ行くよゝ」

空から視線を外して、チラと彼女をみた。なにやらものすごい勢いでこちらに向かってきている。…逃げてもいいのだろうか。ざわざわ…と僕の心が不安に染まる。そして中。

「ッだっしやあああああああああ！！！」

勢いに身を任せたパンダが僕の目の前で踏みとどまり、流れるようにして右拳が下から綺麗な孤を描く。踏みとどまった勢いが膝で吸収され、とてつもないバネを生む。そして飛ぶようにして、その拳は放たれた。一連の動作が生んだ会心の一撃と呼べるようなアップーが、僕の晒し出された顎にクリーンヒットした。

僕の体は宙に放り出された。というかありえないくらい上空にぶっとんだ。嗚呼———今なら天に召されるネ●とパト●ッシュの気持ちがかかるような気がする。

「いつてらっしやいませゝゝゝゝゝ！！！」

彼女が大声で叫んだ。屋上では、パンダのきぐるみを着た神様ビシッと敬礼している。

こうして、僕の新しい人生が幕を開けた。
始まりには必ず終わりがあるが。その逆もまた然^{しか}り。終わる事によつて始まったこの物語。僕はどうかや一人の神様を楽しませなくてはいけないらしい。どうなるかは、やってみないと分からない。ただ、今までの普遍的だった日常は今日を境に一転することだろう。それはそれはハプニングだらけの非日常が待ち受けているんだろう。

大事なことだけ言い終えた僕は、二つに意味で昇天した。

——いつの間にか眠ってしまったみたいだ。

私は気がつくと、ベンチ横の車椅子に座っていた。しんと静まり返った中庭は、人の影すら見えない。視界で動くものがあるとすれば、空を飛んでいる鳥達ぐらいだ。あの鳥はスズメかなにかだろうか？ いや、それにしても少し大きい気がする。結局、名前は分からない。

どうしてだろう…、とても長い夢を見ていたような気がする。は

つきりと覚えているというわけではないんだけど。

たしか、長い道。長い長い道をずっと歩いていた。空がとても綺麗だった。そして、いつの間にか私はなにか落し物をしてしまったみたい。それが何だったのか忘れてしまったのだけけど…。

私はなんでこんな所で寝ていたのだろう。寝る前の事を思い出してみようとはしてみたものの、一体何をしていたのか忘れてしまった。

——ん？膝の上になにか違和感を感じた。

首を下に傾けると、膝の上に甘酒が置いてあった。しかもまだ未開封のものだ。何気なく手でひよいつと持ってみる。スチール製の缶に包まれた甘酒は、まだほんのりと温かった。

はて、私はこんなものいつ買ったんだっけ。と思考を巡らすも、『甘酒』という検索キーワードに引つかかるものは一つもなく、結局思い出せなかった。

私は今まで甘酒という飲み物は飲んだ事がなかったので、少し興味があった。誰が買ったものかは分からないが、私は甘酒のタブに手をかけた。

開かれる前に、新手の悪戯か？と再度周りを見渡してみたが、やっぱり人の姿は見当たらない。

安心した私は、タブに掛けた指に軽い力を込めた。甘酒の蓋はカシュツという小さな音を立てて開いた。

ああ————なんかいけない事をしている気がする。と思いながらも、缶を持ったその手は口元にどんどん近付いている。

そしてついにその中身は、私の口の中へと流れ込んだ。

「まずい…」

私の想像していた味とはかなり違う味が口の中に広がった。完全に期待を裏切られたような気がしてならない。

しかし何故だろう…。このごろ甘酒になにか関係するような事が起きたような気がする。

何か大事な事を忘れているような。心のどこかが空っぽになって

しまったよな、不思議な消失感があった。

結局私はそれが何だったのか、分かる事はなかった。そして時間が経って、そんな事を考えた事すら忘れてしまった。

ガゼルパンチ↓昇天↓転生（今この辺）（後書き）

投稿が遅くてすみませんm（――）m。

今月の終わりぐらいに学校行事の劇をやる予定なのですが、そちらの準備でとても忙しい毎日です。

ちなみにその劇の台本を少し書かせてもらいました。書いたと言っても、ストーリーが出来上がってから肉付け作業みたいなことです。

それと今回の話なんですけど、やっと主人公の名前が出てきましたね。色々考えたんですけど、これでいいかぁ。みたいなノリで。

というか毎度毎度長くてすみません。ネット小説なので、短く見やすく書きたいんですけど、いつの間にか量が増えていくんですよ……。

次回の投稿は劇やテストの関係上、また遅くなると思います。ご了承くださいませ。

では、ここまで読んでくださりありがとうございました。次話もがんばりますので、宜しく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9945r/>

百と九十九

2011年10月5日19時21分発行